岩手県大槌町の災害対応～平野総務部長(現町長)に聞く～

岩手県大槌町の総務部長をやっています、平野です。震災当時は54歳で主幹でしたが、町長が亡くなって、副町長も2011年6月20日で任期が切れ、6月21日から選挙する8月28日までの69日間、私が職務代理者をやりました。

生死を分けたとっさの行動

震災当日は、町長も幹部連中も議会関連で集まっていて地震に遭いました。災害対策本部を役場庁舎前で始めました。「なぜ逃げなかった？」と言われるのですが、以前も庁舎前でやった経験があって、誰も違和感もなく、そこで準備をしている間に津波が来ました。

そして、3時25分ごろ、私が見たときに20～30m奥の方に津波が見えました。もう平場で10m以上あって、黒い壁ができあがっていて、津波だと瞬間は分からなかった。全く音がなかった。

私は玄関前から3階に駆け上がりました。3階のドアを開けたらもう周りは海で、船に乗っている感じでした。他の男の人たちはもう上がれないと覚悟して、後ろの会議室に入って机の上に乗ったのですが、天井まで水が来て助からなかった。でも、人が亡くなっていく姿を見ても、特に悲しい思いはなくて、涙を流すことはなかった。

指揮者になる

中央公民館には管理職の学務課長、生涯学習課長がいました。その方々が避難の方々のお世話をしていました。しかし、ここが災害対策本部だと言いながらも、うまく運営はできなかった。避難所と災害対策本部が一体的になっていると、町民がすぐに役場職員に頼ってくる。

副町長が「おまえが陣頭指揮を執れ」という話になったのは震災翌日の5時ごろでした。まず警察、自衛隊、消防に、「私が全部、陣頭指揮を執りますので、情報は全部、私に集めてください。話は私の方からします」と言って、教育委員会の学務課の執務室にして、私は一度もうちへ帰れなかった。トイレに行く以外は動かなかった。ですから、実際の現場を私は見てない。あの当時はいろんな方々も来るので、その対応で精いっぱいで、私だけが現実離れしていました。同僚たちの遺体があがってくるたびに報告があるのですが、「そうだろう」と言いながら、悲しかったのですが涙一つも出ませんでした。

寒いのは困りましたが、食中毒の心配はしなくて良かった。朝作ったおにぎりを配り終わるのはお昼でした。

職員を守れなかった無念

2 日前の津波注意報は空振り、その 1 年前のチリ地震でも大津波警報は空振り。危機意識が薄かったかもしれません。職員は 136 名のうち 33 名が亡くなりました。生き残った職員やその家族の安否確認もしてやれなかった。ニコニコ笑いながら仕事している職員は、旦那さんやお母さんを亡くしていた。本来なら休むべき被災者なのに、支援者側であるということで無理をさせてしまった。私自身もほとんど 3 ヶ月間寝ていない。そんなことで冷静に行政運営をやれるはずがない。

関係機関の支援

2 日目に、災害本部を立ち上げて、陣頭指揮を執りました。その時は、手一杯で県に報告ができなかったせいで県からうるさく言われました。こちらは一生懸命やっても対応できないのに、「お疲れさまです」「ご苦労さまです」の一言もない。ただ 1 人、振興局の若い職員に、「ご苦労さまです」「本当にお疲れさまです」と言われたときは涙が出ました。こういうときだからこそ、言葉は大事だと思いました。

国土交通省は 3 日目ぐらいから、リエゾンというシステムで入ってきて、朝夕の本部会議の内容を聞いて、次の日には「こういうものなら準備して運ばせます」と連絡が来た。それがものすごく力強かった。ただ聞いているだけですが、明朝には準備ができ上がっていました。

あと近隣市町村の遠野市から 3 日目に米やご飯が入ってきました。遠野はもう、余るくらいのおにぎりを作ってくれた。水も必要だろうと、水と米が次の日には来ていました。

3 日目あたりから、本格的な応急体制、緊急対策が求められてきました。まず、遺体を置く場所を使わなくなった小学校にしました。また、3 日目から 1 週間は透析患者の治療の手配に電話が鳴りっぱなしでした。消防、警察、自衛隊のヘリコプターが飛んでいましたから、患者を搬送したのでしょう。電話も 1 週間たったらピタッとなくなりました。

マスコミと住民対応

首長が亡くなって、災害対策本部を低地で行ったことを新聞に取り上げられました。亡くなった職員の遺族の方々がいろんな思いをマスコミに話すものだから、その対応の方が大変でした。

避難所に災害対策本部があるので、住民が若い職員じゃ駄目だといって、直接言ってくる。第 1 回の避難所の代表者会議を 3 月 20 日に開催しましたが、その時は非難ごうごうでした。最後には頭下げて、「できません」と言った。OB の方々が助けてくれて、各避難所で全部手当してくれました。

住民のキーパーソンが避難誘導をして流された結果です。その方々がいな

かったために、避難所でのまとめ役がいなかった。大変苦労をしました。

通常業務への移行期

5月になっても机の上で寝ていました。2011年4月1日の人事異動で、行政を震災前の体制に戻すという、異常なことを行ってしまった。震災以降、残った課長3人を長にして、避難所運営、物資、遺体関係の3班に分かれて、人手不足ながらまとまって動いていたのに、人事異動後は、従来の行政体制に戻したため事務分掌の壁ができて動かなくなりました。

一番大変だったのは町民課と福祉課です。忙しい課とそうでない課の差が激しく、忙しい課の人間はバタバタ倒れていく。ですから、人事異動を2011年だけで5回しました。できると思った人だけがやって、見事に倒れていく。倒れた者を受け入れた組織は、気を使って別な人が倒れるという負の連鎖が起きました。

とにかく非常時は白旗を揚げるべきだと思います。自分たちが責任を持ってやるつもりでも、一部をどこかでやってもらうことも考えないといけない。防災計画は、136人全員が生きている前提でしか作っていなかったのだから。

体験やノウハウを持った人たちがいなくなったことも大きかった。特にうちは技術者が10名亡くなっている。例えば、水道管がどこにあるかも分からなかった。OBにお願いして対応しましたが、場当たり的でした。役場職員だから頑張ろうとしましたが、無理だったと思います。

今は247名で動いています。正職員は130人、派遣で127です。来年は派遣の数が正職員は超えます。部課長会議に出ている職員は30名、そのうちプロパーは9人だけです。ですから、すごく厳しい運営です。それが、今の私たちの復興状況かなと思います。

遺族への対応

私は町民の方々の要求・要望は当たり前だと思っていますし、それが私の仕事だとは思ったのですが、職員の遺族の方々の対応を間違えたら大変なことになる、と強く感じています。

私は災害の手続きをして判子をもらうために臨時職員を含めて40人の家を全部回っています。本当に各家を回ってこの遺族に殺されるだろう、殴られるだろうというのは何回もあります。録音機をかけて、「あなたの発言したことは裁判の資料にします」というのもあります。職員を亡くすような防災体制だったとつくづく反省しました。

町民の方々が大変だから、やらないといけないとは思いました。でも、私たちも被災しているのに公務員だから隠しながらやらなきゃならないのかな、という思いも片方で持ちながら、すごく苦労した何年間でした。

自治体派遣職員

派遣が来ても130人そこそこの職員が、再任用で来る60歳過ぎの方を含め、一気に倍ぐらいに増えます。今、40代が班長クラスや課長をやらざるを得ない状況で、40代の人は、50歳、60歳の人たちに遠慮して使えない。そして自分たちで抱え込みか、派遣さんの態度が悪いとけんかする。

また、派遣はありがたいので、直接は言えませんが、2ヶ月、3ヶ月で帰られると、かえってしんどいこともあります。新しい人がくるたび、手とり足取り教えても、3ヶ月経つと帰ります。その繰り返しです。最初はうれしかったけど、疲れました。人が増えたからいいわけではない。

今後の行政をどうすべきか

心配なのは、復興においては大きな予算が絡むのに、しっかりとした精査ができないまま執行している。通常では、大槌町は100万円を委託するにも、精査していました。今、100万ははした金で、4,000万、5,000万円の委託料で、これが精査されないまま使われている。

行政改革の名のものに、5年間で198人を136人にまで減らしました。今思えば、物事を考えずに機械的に減らした。

震災前の防災に対する考え方、住民自治の考え方、そのコンセンサスを取るという考え方ができていなかった。だから、今もできない。もし、きちんとした考え方があったなら、人が亡くなっても、その考え方は行政の力として備えられていた。震災前の自治体がしっかりと行政をやってきたか否かが大きな問題だと思います。

職員は、うちに帰ると狭い仮設住宅の中で住まなきゃならない。家族でけんかする方々は日常茶飯事です。その職員に私はボールを投げられない。私は部長ですが、起案は私がやって部下に見てもらいます。これが現実です。

防災対策をどうする

思えば、防災訓練に具体性はなかった。津波の監視カメラはありましたが、電源が切れていた。町村の場合、防災担当が併任にしていたため、防災意識が薄れた。広域消防の職員を増やして、何人かは町に派遣すればいい。特に津波防災は同時多発的なので、どこかでまとめる広域的な連携が必要です。

宝塚の市長が宝塚の復興の本を持ってきたのです。阪神・淡路の場合は直下型地震で私たちは津波だった。規模が全然違う、と思っていたけれども、実際起きると遺体、避難所運営、食事の手配と非常時にやることは同じだと感じました。